

荘銀タクト鶴岡 コロナ対策実証実験

山形県の荘銀タクト鶴岡大ホールでは7月4日、**鶴岡土曜会混声合唱団**の協力により、収容定員の半分以上とソーシャル・ディスタンスを確保しての実証実験を行いました。鶴岡市では実験日までの2ヶ月感染者が出ていなかったため、リスクは低いと判断して実施されたものです。

このホールは、合唱の利用が多いということもあり、ホール側が積極的に取り組み、合唱団の協力を得て行われました。全日本合唱連盟や、全国公立文化施設協会のガイドラインに準拠し、演奏者の距離を前後2m、左右1mと2m間隔の2パターン、さらにマスク、フェイスシールド着用、何もつけないで歌唱といった3パターンのそれぞれの組合せで検証しました。

今回の実験は、歌唱による飛沫の飛散状態などを調べるものではなく、あくまで「合唱に与える影響」即ち演奏者が歌う上でどう感じるか、また聴衆にはそれがどのように聴こえるか、あるいは見た目がどうかという音楽的見地からの総合的な検証でした。

演奏曲は、ア・カペラ曲が「**花さく日々に**」(作曲:セルミジ、訳詞:皆川達夫)、ピアノ付き曲として「**鶴岡市民歌**」(作詞:保岡直樹、作曲:新実徳英)及び「**大地讃頌**」(作詞:大木惇夫、作曲:佐藤眞)を使用。

フェイスシールドとマスク、一長一短

演奏者は当然のように「呼吸がしづらい」「口にマスクがへばりついたり、マスクが下がってきたりする」「音が飛ばない」と感じていましたし、間隔は近い方が歌いやすいと述べています。

一方、鑑賞者の意見は「マスクでこもって発音が聞きづらい」「呼吸が苦しそう」「表情が見えない」ということでした。

また、フェイスシールドは「自分の声しか聴こえず歌にくい」「テンポがわからなくなる」「(照明の反射で)指揮が見えづらい」という意見が多く、とまどいがみられたといいます。逆に鑑賞者は「マスクよりは響く」「声が届いた」「呼吸が楽そう」と、「フェイスシールドは反射して見にくい」など視覚的側面で音楽を楽しむことを妨げるという意見もみられました。

(小見出しを一部訂正しました)

実証実験の結果は、合唱人の多くの方が感じておられると思われるマスクとフェイスシールドに関するメリットとデメリットが確認されたように感じます。

実験の詳細は、YouTube でご覧ください。

<https://youtu.be/6Y4TKNTB1pI>

尚、TACT(タクト)とは、Tsuruoka(鶴岡)、Art(芸術)、Culture(文化)、Terrace(集う場所)から命名されたもので、鶴岡の芸術文化が集う場所を目指しています。荘内銀行のネーミングライツです。



女声合唱団**マリアベルハーモニー**は幼稚園のお母さんサークル時代から数えるともう27年になるといいます。最近ホームページをリニューアルしました。杜の都仙台で「**歌って踊れる合唱団**」を、のキャッチフレーズを掲げて幅広く活動しています。男声合唱では太刀打ちできません(;'')



2005・2011 年全国おかあさんコーラス全国大会「ひまわり賞」受賞など多くの実績を積んでいます。

指揮者**斎藤廣子**さん(写真上)は、指揮のみならず構成や振付もされており、現在**マリアベルハーモニー**のほか、**女声合唱団パパラチア**、**混声合唱団若草**の常任指揮者を務めています。ピアニストは**伊藤公美**さん(写真下)です。



テレコーラス・プロジェクト投票始まる

テレコーラス・プロジェクトは、集って歌うことが難しい現在、取りあえず歌い続ける場づくりを提案しようという企画です。テレフェス(フェスティバル)と、テレコン(コンクール)の二部門があります。

一人で多重録音をしたものから大規模な合唱まで、多様な作品が集まっています。テレコンの「みんなが選ぶ作品」の投票は既に始まっています。

審査基準は、音楽性、エンタメ性、とにかく好き!の三点で構成されています。下記サイトで受け付けていますので、参加してみても如何でしょうか。

<https://tele-chorus.com/>